

「星空と路—3 がつ 11 にちをわすれないために—」

『車載映像 仙台市街地から沿岸部への往復 90 分の旅』上映会アフタートーク

開催日時：2023 年 3月12日 13:30-15:30

話し手：木村グレゴリオ（『車載映像 2011.3.27 仙台—塩釜—仙台港—仙台』記録者）

進行：小川直人（せんだいメディアテーク）

小川：この映像を以前にもご覧になったことがある方はいらっしゃいますか？ 何人かいらっしゃいますね。

撮影したご本人を前にして言うのもなんですが、どういうふうに見たらいいのか、なかなか難しい映像だなとずっと感じておりました……。今日拝見してみて、助手席に乗っている気持ちで見るのが一番良いですね。

木村：そうですね。

小川：木村さんの運転に身を任せてずっと進んでいく。リラックスしていて、もしかしたらちょっとうたた寝して、目を覚ますと景色が変わっていたり。助手席に乗っていると唯一違うことがあるとしたら、気になるものがあっても振り返ったり横を見たりできず、どんどん景色が変わっていくことかなと思いました。

さて、私の感想はこのあたりにして、まず、こういった経緯で、なぜこういうものを映像に収めようと思ったのかを改めてお伺いできますか？

木村：最初に、会場にいらっしゃる皆さんに、せっかくの日曜日でお天気もいいところ、1 時間半もこんなものに付き合わせてしまいどうも申し訳ありませんでした。ご覧いただいた通り本当に撮りっぱなしで、ストーリーもなく、いわゆる「映える」カットもありません。いま小川さんにご感想をいただいた通り、そもそも人前に出すつもりも全くなく撮ったものです。ちょっと補足すると、当時僕は坂下交差点のそばの宮城野区銀杏町というところに住んでいたんですが、仕事の付き合いで、いわゆる支援物資を塩釜や女川のほうに運ぶために行き来する機会が多く、45 号線はよく走っていました。当時こちらにいた方だと経験があると思うんですが、ガソリンは手に入らないし、食べものや他のいろんなものも似たような感じで、だからわざわざ外出しようとは考えずに暮らしていました。ただ、物を運ぶ時にふと、こういう景色はすぐになくなるだろうから、行き帰りのついでにビデオで撮っておこうと。使うか使わないか、誰が見たいのかなんて何も考えずに撮ったものです。なので、今ご覧いただいた通り本当に退屈で、だらだらと撮っています。

小川：そうはおっしゃいますが、木村さんは「わすれン！」の初期から本当に長く参加者として活動されていて、60本以上の映像を収めていただいています。それらの映像を上映したり、あるいはウェブを通じて公開したりしている中で、この車載映像はこれまでいろいろな方に取り上げられてきました。今、だらだらとか退屈とかおっしゃいましたけれども、見た人が何か言わずにはおられないというか、褒めたり貶したりも含めて、さまざまな感想をいただいていた映像の一つだと思います。ご本人としてはどうですか？ 感想を直に聞いたことはありますか？

木村：いえ、ほぼないですね。もともとは2011年3月の地震のあと、5月にメディアテークで地震の被災や生活にまつわる写真や動画などを募集するという新聞記事を読んで、家にあるいろいろな記録が何かの役に立てばと思って預けたんですが、預けっぱなしでほぼ何もしていませんでした。ただ年明けくらいになってメディアテークから、これを市のアーカイブに入れたいのでいろいろ教えてください、どうしてこんな映像を撮ったんですか、みたいなお話をいただいて、人前に出す機会が出てきたという流れですね。

小川：これまでさまざまな感想を持たれることの多かった映像だと思いますが、今日は少し違う角度からいくつか伺います。まず、非常に瑣末なことなんですが、ついでに撮っただけとか、カメラを車に乗せただけとかおっしゃいつつも、それなりに気をつけているところはあるように思います。例えば1時間半の間に2回だけ咳をした以外はずっと静かに運転されている。全くもってついでであれば、途中でちょっと止まるとか、一人で何かつぶやくこともあるだろうと思うんですが、実際にはいろいろ気を遣われていたのではないのでしょうか。

木村：そうですね。シアターのスピーカーで聞くと、音の粗がいろいろ目立ってしまってちょっと恥ずかしくもあったんですけど。

小川：服の擦れる音なんかも入って。

木村：鼻水をすすってみたり。気にしたというほどではないんですが、独り言とか鼻歌とかそういったことは……しないようにというよりは、できなかったですね。車窓の景色が、魔界に潜り込んだといったらあれなんですけど、何だこれっていう……。外を見ながらも、わぁどンドン車が増えてきた、みたいな。放置車両の数が減ってきたら、ここは海から離れてるのかなとか。意識して抑えたというよりは、あまり言葉が出なかった記憶があります。

小川：もう一つ、あらためて拝見して気になったのは、車が止まる度にエンジンが止まるのは、アイドリングストップではなくて、手で止めているんですよね？

木村：そうです。

小川：先ほどもおっしゃっていたように、ガソリンのことがあるからでしょうか。

木村：主にそれが理由です。古い四駆の車だったこともあって、あまり燃費も良くなかったです。土地勘のある人はおわかりだと思うんですけど、今ご覧いただいた通り、苦竹あたりの車列は、ガソリンスタンドの順番待ちの車なんですよ。

小川：左側にずっと車が並んでいる場面がありましたね。

木村：多賀城あたりまで行くと、路肩にあるのは津波をかぶってやむを得ず放置された車なんです。坂下交差点からの車列は苦竹のコスモ石油に並ぶ車で、幸町のガス局前までずっと続いているんです。ずーっと坂下交差点を超えて、並んで並んで。ああいうのを近所で見ていたので、俺みたいな被災者じゃない人間が無駄にガソリンを減らしちゃいかん、必要な人に回るように、みたいなことは考えていましたね。

小川：そういう点では、映っていることだけではなく、木村さんがあの時に気にかけていたものが、エンジンを入れたり切ったりというところに現れている。

木村：そうですね。本当に後からわかることが多くて。当時はそれこそ行き掛けの駄賃で、ビデオで撮るだけ撮っておこう、で終わっていたと思います。

小川：後から気づくという点でもうひとつ。昨年度に私共が企画した「ダイブわすれン!」というものがあまして。これまでに寄せられた資料を今後どう活用できるかということを検討するために、何人かの方にこれまで公開した DVD 映像をすべて見ていただくという結構無茶ぶりの企画なのですが、その後の話し合いの中で、この車載映像に言及された場面があったのでご紹介します。アーカイブの専門家でおられる明貫紘子さんがこんなことをおっしゃっていました。

明貫：車載映像に映っている映像はもちろん興味深いんですけど、運転している彼が、自分のアパートの駐車場から出るじゃないですか。そしてまた、ある意味自分のベース（アパート）に戻ってくる。エッセイにも書いたんですが、私はちょうどその時に『ストーリーメーカー：創作のための物語論』（星海社、2013年）という大塚英志さんの本を読んでいて、いわゆる物語構造の……ここで言う物語というのはいわゆるフィクションの小説や映画の構

造ですが、(同著では、) 代表的な構造パターンとして、「行って帰る」、「欠如を回復する」という2パターンがあると指摘していて。車載映像は、まさに「行って帰る」パターンだなと思って見た時に、映像を読み取るフックができたような気がしたんです。つまり彼の行動というのは、津波が来ていない場所から津波の被害を受けたところを通過して、また戻ってくる。彼の日常、非日常の中の日常と言ってもいいと思うんですけど、安住の場所から非日常の場所へ出かけていくわけじゃないですか。で、また戻ってくる。本当に単純なことなんですけど、それが私にとってはかなり重要な文法だったんですよね。映像の中の文法というよりは、見るための文法。おそらく本人はそんなこと全く考えていないと思うんですけど、まさにそういうことを示したいわけでもないと思うんですけど、見る側の文法みたいなものがあったほうが私は見やすいなと思いました。そうやって見ると、ああ、なるほどなど。単に被災地を映した映像ではないと。」

『鼎談映像：ダイブわすれン！に参加して』より

小川：木村さんは明實さんの指摘をどう思われたんですか？

木村：びっくりしましたね。あ、そうか、意識してなかったけど、そういえば心当たりがあるなと感じました。今ご覧いただいた通り、当時借りていた駐車場から出て、また同じところに帰ってくるんですが、実は一度駐車場を出てしまって、あ、テープを回してねえやと思って一旦駐車場に戻り、REC ボタンを押してまた出ているんです。どうしてそんなことをしようと思ったのかと言うと、頭と終わりが同じ場所じゃないと、たぶん収まりが悪い、意図が生まれてしまうというか。抽象的な話になってしまうんですが、見て欲しいところを見ってもらうために、他は極力目立たないほうがいいだろうということは、考えていたと思います。

小川：その結果、冒頭でおっしゃっていたように、あまり作品っぽくしない、できるだけ編集を入れない、やらないということに繋がっていったということですか？

木村：そうですね。結果的にですが。ちょっと個人的な話をすると、当時いろいろとイライラする報道が多くて。

小川：テレビや新聞ですか？

木村：いわゆるメディアに対してですね。もちろん必要なお仕事だし、僕もそういう業種に近いところで働いているので理解はするんですが、ちょっとあまりにも、いわゆる被災した人に対してひどいなと思うところがあって。僕自身はボランティアに行こうとか、何か現地

でレポートをしようとかは考えなかったんですが、できることが何かあるならやろうという程度のことは考えていて。これをやったら申し訳ない、これをやると人の邪魔になる、ガソリンを減らしたくない……とにかく他人の邪魔をしないように、みたいなことは考えていて。その結果、記録したビデオもこういう冗長な映像になったのかなという気がします。作品ではなく、ただの映像ですね。

小川：これが公開された当初においては、もちろん映っているものについて皆さん注目されたと思います。あるいは今日お越しになっている方も、時間が経ってようやく見てみようという気持ちで来られたかと思いますが、今こうして伺うと、映っているものだけではなく、これを撮ろうと思った木村さんの気持ちも重要な鍵ですね。

木村さんは今も記録を続けておられるそうで、これは震災の記録ではないのですが、ご覧いただきたいと思います。一昨年（2020年）の仙台七夕の時に撮られていたものです。

木村：ブレで気持ち悪くなったらごめんなさい。自転車に付けた小型カメラで撮ったものです。やっていることは車載映像と一緒にです。

小川：仙台駅から名掛丁のところに入っていくところですね。なぜ七夕の時期に撮られたんでしょう？ 一昨年といえばアレですか？

木村：一昨年と言えば、に尽きるんですが、ご覧いただいた通り、吹き流しも明らかにスカスカですね。コロナで密にならないようにということで、あまり大っぴらに開催できなかった年。たぶん地元の方も、こんなスカスカな初日の七夕は見たことないんじゃないかと。あとは歩いている人がマスク姿だったり、お店のシャッターが閉まっていたり。のちのち誰かが思い出したり、何かしようと思ったりした時に役に立つかもしれない、街の記録になるのかなということで、自転車を出しました。

小川：これも誰かに頼まれたわけではなく、撮っておけばいつか誰かが使うかもしれないという気持ちで撮られたのでしょうか？

木村：そうですね。それこそ「わすれん！」に収めてから人目に触れるのは初めてかと思います。なので、もし今ここにいらっしゃる方が、のちのち何かご自身の活動などに使えそうなら、メディアテークに連絡して使ってくださいというくらいに、使い道は何も考えていないものです。

小川：実のところ我々も「東日本大震災にまつわる記録」と銘打っている以上、それ以外の記録の扱いについて答えを持っているわけではないのですが、この新型コロナのことも大

きな歴史的な出来事であることは間違いないので、きっとこの閑散とした七夕の映像が必要になる時は来るだろうと予感します。

それでは最後に、木村さんから一言いただけますか。

木村：車載映像は今ご覧いただいた通り、誰でもできる、ついでにやれるようなものなので、震災やコロナといったきっかけがなくても、たとえばご自身の車のドライブレコーダーなどで撮っておくと、ああこういうことあったなとか、この景色はもう見られないから使いたい人は使ってくださいみたいな、先々に渡すものになっていくということを、後から感じています。